秋高同窓会だより

題字は塩田会長

発行者
秋田県立
秋田高等学校同窓会

印刷所
秋田オフセット
印刷株式会社

水戸一高との姉妹提携

六月に秋田市で調印

事業方向など協議

提携準備委 小玉得太郎委員長

水戸訪問 八月の総会で報告へ

提携協約準備のため平成二年三月十二日、委員会を代表して、私と桜谷吾朗、山中良二郎の両委員、伊藤守一事務局長が水戸を訪問した。以下は水戸ゴールデン・ホールで行われた両校同窓会準備委員会協議の報告である。

○水戸側委員
山口清隆　知道会本部副会長
上田　稔　水戸知道会　地区会長
小野高宗　水戸知道会　常任幹事
山形晴一　知道会本部組織委員長、日立知道会事務局長（準備委員長）
外岡　仁　知道会本部常任幹事、水戸知道会幹事長
中村彦蔵　知道会本部常任幹事
大曽根文彦　知道会本部　常任幹事
奥野茂雄　知道会本部　常任幹事

の八名に後藤卓三知道会本部幹事長の出席を得て、双方自己紹介に始まり、両委員長の挨拶、経過説明がなされ直ちに協議に入る。

一、委員会構成の性格について。

つまり同窓会同志の提携で追って学校に及ぼすという考え方もわからぬではないが、やはり最初から学校代表委員の参加が望ましいと思うかどうか。当方は同窓会から八名、学校から二名となっており、この際同じ構成がよくないか。先方諒承、検討して回答をもらうことにした。

二、協定文ついて。

あらかじめ当委員会で用意した協定文案に基づき、意見交換に入る。慎重なる協議の結果、おおむね合意に達したが、ただ特色的なことは、当校は秋田高校同窓会となっているのに対し、先方は知道会（水中・水戸一高同窓会）となっているため、単純に水戸一高同窓会にならないのかと質問したところ、これだけは固有の定型名称になっているため変えることは出来ないとのこと、むしろ当方が「羽城会」などといった冠名称にしたらどうかと談笑となった。

三、事業の方向づけについて。

双方予算、並びに学校の事情など検討した上で、再審議することにした。

参考資料として水戸側から提出された「常陽文芸」が特集した「佐竹一族と秋田」「安東移封での茨城」など面白く、ひとつのヒントになるものであろう。

四、タイムスケジュールについて

以上のことを処理した上で六月中には調印を済ませ、七月の常任理事会を経て八月の総会に報告出来るように運ぶことにし、調印は秋田市において行うことにする。

以上、十七時に始った協議が十九時近くに終了、先方で設営した中川楼に足を運び合同で懇親会を持った。

翌十三日は水戸一高に赴き、学校長他と要談して校内外の視察、市内案内と続き、弘道館～水戸芸術館～茨城歴史館～偕楽園～県立近代美術館と見学。人口二十五万、秋田市の半分にも満たない面積の都市、その形成にこそ提携のメリットが出てきはしないだろうか。

なかんずく市予算のいちわりを運営資金にまわした、今話題の自己完結型の市立芸術館の今後に注目したい。

水戸市で行われた秋田・水戸一高同窓会提携準備委員会協議会

総務委員長に小澤氏

120周年実行小委 正・副委員長決まる

昨年十二月十六日の常任理事会において、会長、副会長、幹事および常置委員に一任されておりました「一二〇周年記念事業実行委員会」の委員の選考について、去る二月二十三日午後五時三十分より秋田ビューホテルで上記役員の二十名が出席して開催された。

会議は塩田会長のあいさつに続き、室田校長から学校の近況報告、次いで事務局より同窓会の近況や今後の予定などについて説明があった。

続いて塩田会長を議長として協議に入り、まず委員長、副委員長の選考から協議することとなった。

それについて出席者から意見があり、先に総会で承認された七つの小委員会のうち、総務委員会の役割は何かとの質問がなされ、記念実行委を総括するものであれば他の委員会と並立させるべきではなく、また人選も考慮すべきであるとの意見がでた。それについて、様々な意見がでたが、議長の裁量で別格の委員会はつくらない。ただし、総務委員長には副会長の一人を充てることとし、委員には他の委員会委員長を入れることとする、と決定した。

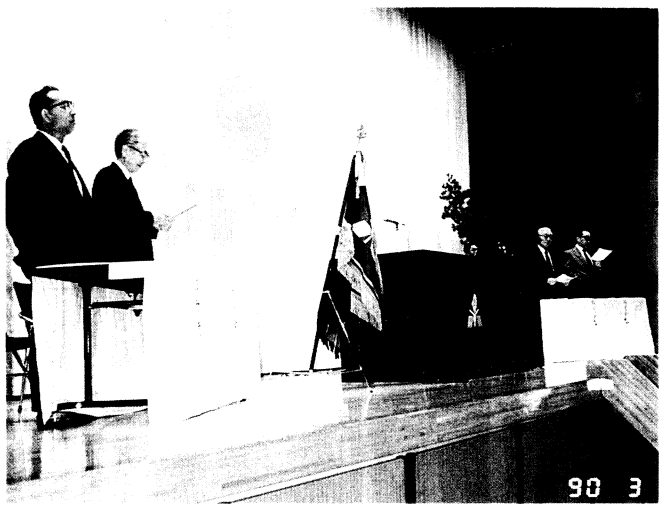
これによって選考を進めることになったが、七委員会のうち、財政、名簿、広報の三委員会は、常置の委員長、副委員長が兼ねることになっているので、四委員会の正・副委員長を選ぶことになった。

まず、総務委員長には議長の裁定で小澤副会長が当ることとなり、副委員長には太田企画委員長が選ばれた。以下各委員会の正・副委員長は別表のとおりである。

次にその他の委員の選考ということになったが、これは人数も多いし、委員長の考えもあるだろうから、委員長と副委員長に一任ということになった。

ただし、人数は10人～15人を目処とし、うち一名は必ず女性を入れるものとする。なお、委員の委嘱は六月中に行う予定である。

委員会名	委員長	副委員長
総務	小澤　雄象(12)	太田　寿男(25)
財政	小玉順一郎(20)	豊口　祐一(34)
行事	梶原　志郎(19)	山谷　浩二(20)
校史	渡部誠一郎(25)	田口　能祐(22)
名簿	広島　吾郎(23)	工藤　雄一(33)
広報	信太　聡一(27)	田宮　忠(32)
施設	湊　貞造(20)	高橋　昌一(21)



453人の新会員を迎えて開かれた同窓会入会式

時代越え、絆大切に

同窓会入会式 新たに453人が仲間に

平成元年度の同窓会入会式は、例年通り、三月七日（水）、卒業式を終えて後、母校の体育館で、梶原忠郎氏（昭十九卒）の司会で執り行われた。

男女四百五十三名の新入会員を前にして、塩田雄次会長（昭五卒）の入会歓迎の挨拶に続き、前秋田県副知事丸山完（昭十九卒）が、先輩を代表して、激励の言葉を述べられた。

最初に塩田会長が「秋田高校を卒業して同窓会員となり、今までより広い範囲の仲間ができるわけであるが、皆さんのような若い人を同窓生として迎えることは大きな喜びであるとともに、心から歓迎の意を表する。同窓生のつながりは、普通とは違った別の深い関係を感じるもので、社会に出ても、進学しても、いろいろな場所で、様々な機会に同窓生と顔を合わせることは、生きてゆく上に力となり楽しみともなるものである。

本校の同窓会は、多方面の年代やあらゆる地域で活躍している巾の広いつながりである。地区の支部活動や年次制活動に積極的に参加して、同窓の絆を大事にしてほしい。」と挨拶した。

続いて同窓会を代表して、丸山完氏は、旧制中学・高校の印象から共同生活の大切を学び、公務員生活から、戦前との比較しての現在の日本の良さ、仕事では、マンネリズムや事なかれ主義を排して、絶えずエノベーション（革新）が大切であることを熱っぽく語り、自分の殻に閉じこもらずにグローバルな眼をもって事に当り、自分の責任と判断で、ゴーイングマイウェイを貫き、県外に出ても故郷を愛する気持ちを忘れずがんばってほしいしと述べ、深い感銘を与えた。

最後に新会員を代表して、佐々木浩太郎君が「新入会員となり喜びを感じるとともに甲子園出場の際の先輩の方々の母校へのいつまでも変らぬ思いに、深く感銘を受けた。校歌の〝先蹤追ひつつ未来の望　ゆたかに健児は其途進む〟という歌詞には、時代を越える秋高健児たちの結びつきと将来への大きな展望がこめられていると思う。これから同窓の一員として努力することを誓う。」と入会の決意を力強くのべた。

この日の日程すべてを終って、茨城県在住の秋高同窓会員約一八〇名による会員による茨城支部設立の運び方について、有志を招いて懇談することが出来た。

大観と広業。芋銭と百穂。野口雨情と成田為三、小松平五郎。さらには水戸学と秋田学。技術交流の面では、つくば、日立など優秀な同窓生が頑張っており、必ずしも歴史的縁故ばかりでない、発展への可能性があるのではないかと、談論つきないままホテルをあとにした。

最後になったが、水戸側の好意あるご配慮に深く感謝申し上げたい。

秋高女子卒業生親睦の集い（若菜会）総会は八月十九日（日）午後四時から秋田市彌高会館で開く。会費は記念写真代込みで七千円。連絡先は35年卒、吉田明子（秋田市手形字山崎二十二―一）TEL（三四）〇九五〇。

天上天下

茨城県人を代表する「水戸っぽ」気質は、一本気で直情径行型と言われる。そのルーツは、万延元年（一八六〇）の「桜田門外の変」にまでさかのぼる。幕末で不満のやり場のない若者たちが、実力行使に出て、時の大老を斬殺したこの事件は、明治の夜明けの導火線にもなった。「水戸っぽ」の行動力は、短絡的な要素を示しながらも、その後の日本歴史にたびたび登場する。現代民主政治のはしりである自由民権運動にいち早く参画したのも「水戸っぽ」。昭和になってからは、血盟団事件、さらには五・一五事件、二・二六事件と続いた過激行動にも水戸・愛郷塾の思想が強く影響している▼こうした水戸の〝突っぱり〟精神の中で一貫しているのは、進取の気風にある。だが、その割に茨城県の近代化が遅れたのも事実。かつては週刊誌に「日本で最も住みにくい県」とたたかれたこともあった。首都・東京へ至近距離にあるのに…とハタ目には不思議に見えるほど▼『常陸国風土記』には「それ常陸の国は、堺はこれ広く、土壌もっちこえ、物産ゆたかなるところなり」とある。肥沃な土地に加えて、恵まれた山海の物産、それに気候温暖という恵まれた国土が、のんびりした県民性を育くんでしまったのだろうか。それとも「水戸っぽ」の先取り精神は、町づくりは別、というのであろうか▼本校と水戸一高・知道会との姉妹提携の話し合いは順調に進んでいる。六月中には、先方が来秋して調印式も予定されている。佐竹藩が緑で結ばれる交わりだが、必ずしも歴史時な緑故ばかりにこだわることもない。知道会との結びつきをきっかけに水戸学の精神を学び、明日のまちづくりの糧に生かすべきである。

知道会との協約準備進む

水戸一高、姉妹提携準備委

茨城県支部設立を援助

知道会との協約準備進む

水戸一高姉妹提携準備委

前年度から進めてきた知道会（水戸一高同窓会）との姉妹提携に関する協約の調印を準備する第二回提携準備委員会は、四月二日午後五時三十分から千秋会館に於て開催されました。

この会は、先に知道会の要請もあって、去る三月十二日に小玉委員長、桜谷委員、山中委員と、伊藤事務局長の四人が水戸市を訪問し、知道会の準備委員と、懇談を行ってきた（詳細は別項で掲載）ことを受けて開かれたものである。

会は、委員長あいさつに続き、事務局長から知道会との懇談会の状況報告を行い、委員長からは、秋高同窓会茨城県支部設立準備のための懇談状況の報告があった。

次いで、委員長を議長として協議にはいった。まず協定文についてであるが、これは、水戸に持参した素案を元に、知道会と話し合った点を取捨選択して原案としたものであるが、各委員からできるだけ柔かな表現（口語体）をということで一部の語句の修正がなされたが、基本的な表現の修正はなかった。これを知道会に送付し、知道会との合意を得られたら調印にもっていきたいと全委員が一致した。

引き続き、日程案について協議したが、これは知道会との懇談で、五月中に協約文を交換し、六月中に知道会が来秋し、秋田で調印式を行いたいとの希望であることを提案し、全委員これを了承した。

その他としては、秋高同窓会茨城県支部の設立準備のためには、本部が積極的に会員の啓蒙にあたるとともに、当分の間は物心両面にわたり援助の必要があることを全員で確認し了承した。

総会は八月十八日(土)の予定

当番年次打合会

本年度の当番年次（S十、二十⑤、三十、四〇、五〇）打合会は、四月十日、栄太楼旅館に於て小玉副会長、太田企画委員長、岸部副委員長と、各年次より二名の代表者が出席して開催された。

まず、総会の日程についてであるが、帰省者の参加を考慮した場合、お盆中でも良いのではないかとの意見もあったが、結果的にはお盆を避けて八月一八日（土）午後二時から秋田ニューグランドホテルと決定。例年どおり講演を行うこととし、その人選は三十年次が担当することになった。まだ事前準備のため、八月上旬に第二回の打合会を開催し、万全を期するとともに各年次とも会員の出席者増に努め、会の盛り上げを図ることとした。

その他では、同窓会だよりの協賛広告六十コマの年次分担と、新入会員入会式の司会、激励者の人選を二十年次が担当するなどを決定し、了承された。

本校教職員の人事異動

▽退職

教諭　佐藤　直彦先生
教諭　田口　能祐先生
教諭　白瀬　昭　先生
講師　木村　修　先生
技師　安田　栄治さん

▽転出（氏名・転出先）

畠山　和也先生（本荘高）
佐藤　晋　先生（本荘高）
出口　金也先生（五城目高）
吉田　正逸先生（県博物館）
根田千雅子先生（仁賀保高）
須磨　武　先生（県企画調整課国際交流室）
小熊　香　先生（六郷高）
鎌田　善典主査（秋田中央高）
原田　哲子主任（社会教育課）
朝水　朋子主事（新屋高）

▽転入（氏名・前任高）

大石　潔　先生（秋田北高）
河先　進　先生（秋田中央高）
高島　清子先生（秋田北高）
高橋　直文先生（秋田西高）
長崎　淳子先生（秋田中央高）
浅野　貞一先生（新屋高）
佐藤　高　先生（花輪高）
庫山　徹　先生（新屋高）
鈴木　政亜主査（秋田工高）
嵯峨　克子主任（秋田中央高）
小林　昌子主任（秋田北高）
佐々木吉文技師（県立聾学校）
石井えり子先生（講師として）
腰山　潤　先生（講師として）
金　弘樹先生（講師として）

事務局だより

▽だより第三十一号四面の「高橋さんが独学で栄冠」（全県ピアノコンクール）の記事で、高橋さんの氏名を掲載しませんでしたので、お知らせするとともにお詫びいたします。

一C（現二C）の高橋真由美さんです。

また、同三十一号一面の「三教諭が定年退職へ」の記事執筆者が藤森健司記となっておりますが、これは四面放送委員会記事執筆者の誤りでしたので、お詫びして訂正いたします。

▽平成元年度も終り収支決算も済みましたが、役員会費、年次会費の収入状況は次の通りです。ほぼ前年度と同じ納入率ですが、金額では役員会費が年次会費を上回っています。

役員会費納入率	（人数比）	七十五％
年次会費納入率	（金額比）	八十　％

円滑な会の運営のためには、会費収入率の向上が必要です。

平成二年度の納入にあたっては、会員皆様のご協力を切にお願い申し上げます。

▽同窓会名簿三十五号の「正誤訂正・異動表」が三月末に印刷が出来上り、四月早々に約五千五百部の発送を終えることができました。皆様のご協力を心から感謝申し上げます。

▽だよりの「つどい」には、支部総会や同期会の模様をお知らせしておりますが、原稿が少ないようです。開催されたら是非ご投稿くださるようご協力をお願いいたします。

今年度から事務局長は、毎週月・水・金曜日に出勤しております。事務局に用事のある方は、月・水・金の午前十時から午後四時までの間にお出でくださるなり、お電話くださるなりしてください。ただし、お出でのときは来る前にお電話をお願いします。

なお、事務局直通電話（三二－九五五三番）に人が出ないときは、必ず学校事務室に電話（三二－七二〇〇番）をしてみてください。

▽だより三十一号で報告後の会務は次の通りである。

1・12	秋田市役所羽城会総会
1・20	二十六年次同期会
1・28	新卒業生との懇談会（男鹿支部）
2・7	年次強化策懇談会
2・10	飯田川支部総会
2・22	大館支部総会
2・23	百二十周年実行委員会委員選考会議
2・28	県庁支部総会
3・7	新入会員入会式
3・12~13	提携準備委知道会訪問
3・20	大潟支部総会
3・21	八郎潟支部総会
3・23	井川支部総会
4・2	姉妹提携準備委員会
4・10	当番年次打合会
4・13	広報委員会
5・10	名簿委員会
5・12	東肥羽城会総会
5・12	松鳴会総会

同期会開催に意欲

各年次の実情など紹介

年次強化策懇

平成元年度の年次強化策懇談会は、二月七日午後六時から鎌田会館に於いて開催された。

同懇談会は同窓会の活性化の一環として、若年次の組織の整備、強化をすすめるため、六十三年度から開かれているもので、今年は二回目の会合である。

この日は四十二年次から五十四年次までのうち、既組織（四十八、四十九、五十四年次）を除く九年次から二名づつの代表が出席した。会は塩田会長のあいさつに続き、太田企画委員長、広島名簿委員長からそれぞれ委員会の現況が報告され、事務局長からは財政、広報委員会の状況と、百二十周年実行委の準備や水戸一高提携準備委の状況ならびに会費納入状況などの報告があった。

次いで太田企画委員長の司会で懇談に入り、それぞれ自己紹介ののち、各年次の実情（運営状況や強化策、同期会の開催、名簿の作成など）をそれぞれ紹介された。

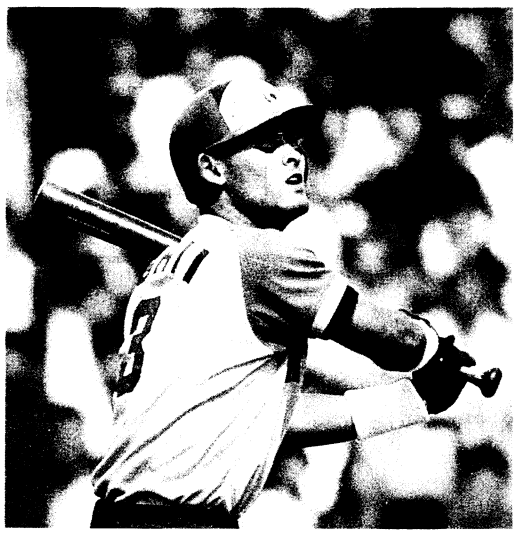
それによると、五十二年以降五回も同期会を開催し、昨年は名簿も完成させているが、同期会に多くの人を集めるためには、開催時期がむずかしいという年次（四十六年）、昨年始めて同期会を開催し、今年も開催して名簿も作成したが、今後は二年に一回開催を決めた（四十三年）、六十二年から毎年開催しているという（四十五年）、昨年八月に開催している（四十四年）、六十二年に一回だけ開催している（五十年）などがわかった。

そして、第一回目のこの会合が開かれた六十三年七月以降から各年次とも組織の整備、強化に積極的に取り組まれたことを強く感じた。

だがその他の年次では、クラス会や仲よし会は実施しているものの、同期会としてのまとまった会合をもっていないし、連絡もとりにくいというのが実状である。ただ各年次ともクラス会を基盤にして拡げていき、同期会を開催し、活発化をはかりたいとの意欲を示していた。

また、各年次とも本部納入の年次会費や年次自体の運営費の徴収方法にも苦労していることがわかった。それは若年次になるにつれて、県内在住者が少なく、在住者でも異動が多いためと考えられる。

以上、各年次の悩みや先輩の助言など、年次の枠をこえた情報交換があり有意義な会であった。最後に、太田委員長から年次強化のために一年次参万円までの補助を計上しているので、これを活用して年次強化に努めていただきたい。そして、同窓会のあらゆる面にもご協力をお願いしたい。それが母校の振興発展に寄与することを自覚し、大いに頑張ってもらいたいと締めくくり閉会した。



古里でデビュー

先発、残念安打は出ず

石井浩郎選手（近鉄）

本校出身でただ一人のプロ野球選手・石井浩郎選手（S58年卒・近鉄）は、五月二十日に県営球場で行われたロッテ戦にデビューし、故郷に錦を飾った。

石井選手は、本校を卒業後、早大、プリンスホテルとエリートコースを歩み、全日本の四番打者という勲章を引っ下げて今春ドラフト三位として近鉄に入団した。

しかし入団直後に体調を崩し、入院生活を余儀なくされて、スプリングキャンプを犠牲にするなど心配されていた。

しかし四月下旬退院とともに実力を発揮し、ウエスタンリーグではデビュー戦で満塁本塁打を放つなど大当り。それが認められて一軍に引き上げられた。

県営球場では七番DHで先発、安打こそ出なかったが、二打席目には、2－0と不利なカウントに追い詰められながらも難しい球を選んで四球で出塁、反撃のチャンスメーカーとなった。

二回めの先発出場が古里となった石井選手は、さすがに緊張したようすで「できれば安打を打ちたかった」と残念そう。それでも超満員のスタンドは、ご当所選手の元気なデビューに大きな拍手を送っていた。

慶　祝（判明分）

顧問　小田島　邦夫
勲四等瑞宝章

S8　高橋　精
勲五等双光旭日章

哀　悼（判明分・敬称略）

鈴木　昌	S26	秋田市	1・12
工藤　正雄	S7	秋田市	1・12
高田　昭一	S23	大曲市	1・12
刈田　文雄	T7	秋田市	1・12
山内　福麿	S12	函館市	2・1
三浦　三男	S12	前橋市	2・1
石山　鐐作	S11	秋田市	2・1
青山　忍	S17	秋田市	2・1
大越孝太郎	S2	秋田市	2・2
川口彌之助	T12	秋田市	2・2
三浦　伝六	S8	秋田市	2・2
古屋　晋甫	S27	秋田市	2・2
加藤　千雄	S28	五城目町	2・2
川原田　弘	S7	秋田市	2・2
明石　祥子	S55	秋田市	2・2
江畑　直信	S13	佐野市	2・2
竹内　弘毅	S5	東京都	2・5

株式会社 武蔵堂
代表取締役 杉山良一（S30卒）
全日本武道具連合会会員
剣道具専門店
豊山 秋田市千崎字東五十目一番八号
電話（〇一八八）四四五一
フクシ（〇一八八）四八九四

秋田土建株式会社
取締役社長 北林一成（S50卒）
本社 秋田市山王五丁目八ノ二
電話（〇一八八）六五七九番
（〇一八八）六五七四二番
出張所 秋田県北秋田郡森吉町米内沢
電話（〇一八六）七二〇〇番

歯科・矯正・小児歯科
たかはし歯科医院
院長 高橋是崇（S30卒）
秋田市中通3丁目4－58
ハレロワイヤル2F
電話 (0188)33－2322
Fax (0188)33－2285

山寺酒店
山寺慎子（S30卒）
〒010
秋田市山王二丁目二－三
電話二四－一九一〇

インテリジェント化する オフィスニーズに応える
株式会社 秋田コクヨ
代表取締役社長 岸部恵一（S30卒）
秋田市卸町4－1
電話 (0188)62－6345

公共下水道・農村下水道のコンサルタント
東京上下水道設計㈱
取締役秋田支所長 飛田博（S10卒）
本社／東京・富士見☎265－3337(代)
秋田市・山王ビル☎65－0741

新屋のOBが気勢

息子が親父を紹介する場面も

松鳴会

秋田市新屋地区の秋田高校同窓会（松鳴会）は、五月十二日午後六時から日吉会館で開かれた。

同会は新屋並びに周辺地区に在住する秋高同窓生で組織、この日は約六十人の会員が出席した。

深井博之会長（S八年卒）のあいさつに始まり、来賓の斎藤広孝教頭が母校の近況を報告、伊藤守一同窓会事務局長が水戸一高との姉妹提携問題、百二十周年記念など同窓会本部の当面の課題について説明した。

この後、昭和四十七年卒、中野鋼一氏の進行で懇親会に入った。この日の出席者の最長老が昭和七年卒の大島俊平氏。最新鋭が同五十四年卒の渡辺覚氏と実に半世紀近い年齢差。

懇親会は大先輩に敬意を表して、大島氏の乾杯の音頭で始まり、粋のいい渡辺氏が校歌の音頭で盛り上げる。途中で、司会者が金出席者を紹介したが息子が父親を紹介する場面も出るなど和気あいあいのうちにお開きとなった。

会長以外の主な役員は次のとおり。

▼副会長＝太田寿男（S二十五）秋山まり子（S二十九）▼幹事長＝中野源一（S二十）▼幹事＝大島三代助（S二十二）に山寺慎子（S三十）（信太記）

三年振りの再会を喜びあう

三七年卒同期会

平成二年一月二日、秋田市「杉のや」において「三七年卒同期会」を開催しました。これは、前回の同期会で三年に一回開催するとの決定により開かれたものです。

桜谷吾朗先生、大綱定義先生、清水重孝先生の御出席を願い、高校時代の話しの輪が、三先生を中心として続き、楽しい会となりました。

なお、懇親会の前にして約十分位時間を頂き、クラス別幹事を選任し、学校理事五千円、クラス幹事二千五百円の年会費を同期会に出す事に決定し、次回は平成四年の夏に開催することとなりました。（大島駿一記）

その名も東京紫紺会

五十一回（昭和十三年卒）生の第二十回クラス会（今回から東京紫紺会と呼称することを前回とり決めた）は、一月二十七日（土）午後三時からJR東京駅八重洲口の椿山荘で開催した。

今回は加賀谷徳治君（当日欠席）の斡旋で足場が良くて、そのうえ日本座敷の会場をキープできて十四名のクラスメートが参集した。

今回は大半の者が馬齢七十を数える年なのだが、今や日本人の平均寿命は男性で七十五・五才になったのだから、昔杜甫のいった「人生七十古来稀なり」はもう古語で、むしろ「人生七十近来甚だ多し」といってもよく、少なくともあと五年の余命は得られそう、さすれば喜寿（七十七才）傘寿（八十才）は手の届くところに来そうだといったことが話題となった。

生憎秋田からのご出席者がなく「ふるさと」の近況がきけなかったのが大変残念だったが、恒例により物故者の黙禱にはじまり、校歌・校友会歌の斉唱をし往時を偲び回顧談に花が咲き、お互いに残りの日々昏れるには今だ遠きを思い、大事に生きることを語りあい、再開を約して午後五時半散会した。

当日の参加者は次の通り

北嶋千代吉　斎藤淑夫　坂本光彦　佐藤吉治　佐藤久　進藤忠男　菅原菊男　辻裕　長嶺三雄　中山茂　早川太郎　三沢秋晴　宮田光男　山信田伸二（辻裕記）

乳井先輩が乾杯の音頭

大館

二月二十二日午後、大館支部総会を「いとく」で開催した。本部から伊藤事務局長を迎え、会員二十五名が出席して行われた。

布袋屋会長のあいさつ、伊藤事務局長から同窓会の近況報告などがあり、乳井先輩の乾杯の音頭で懇親会となった。

初めは秋中、秋南、秋高と席を分けていたが、酒の量と共に区別がなくなり、例年の福引余興が始まる頃には誰とでも話の合う楽しい一夜となった。最後に全員で校歌を歌い、お互いの健康と再開を約して散会した。

新卒業者招き懇談会を開く

男鹿支部

男鹿支部では、一月二十八日（日）男鹿駅前・ホテル諸井にて、男鹿支部地域（男鹿市、若美町・天王町）における本年三月卒業生・昨年三月の卒業者を招いて新春懇談会を開催。

卒業生は、受験時期の関係から十名・支部役員、二十名が出席。

まず、秋山秀麿幹事長（昭二十七年卒）は「私達、男鹿支部は、同窓生の交誼・親睦を図りつつ、多年に亘って文化講演会等を開催し、地域の振興に貢献するなど、他に類例ない活動をし、高い評価を得ている。諸君はこの伝統を受けついで、若い情熱を傾注し支部に新風をもたらして頂きたい。諸君が大成されんことを切望する」との開催の辞を述べた。次いで、加藤義孝支部長（昭十六年卒は「勉学にスポーツに全力を尽くして、習得した成果を今後、郷土・男鹿の発展に役立てて頂きたい。諸君のご健闘を祈る」と挨拶。

また、本懇談会長である森山勇一郎副部長（昭十三年卒・森山歯科医院長）は「私は諸君と懇談できるのは慶賀にたえない。諸君の若い意見を拝聴し支部活動の参考にしたい」と述べた。

この後、鈴木与作支部顧問（昭四年卒・元男鹿市議）の乾杯後、記念撮影をし懇談に入り徐々に親愛が高揚。今津谷勉幹事（昭三十七年）司会で、卒業生が自己紹介と抱負等を述べた。これに対し、支部役員は、在校時代の想い出、人生経験等の花が咲いた。最後に、渡辺昭男副部長（昭和二十年卒・男鹿観光協会専務理事）の熱烈な音頭で、高らかに校歌を斉唱し、更に万歳の唱話をし極めて有意義に閉会となった。（秋山秀麿記）

和気あいあいと

秋田経済法科大学紫水会

歴史は三十有余年に

秋田経済法科大学では紫水会と呼ぶ同窓生の会があり、武塙三山先生の揮毫された会旗もあって、毎年、懇親の会を開いています。学園創立の翌年（昭和二十九年）に結成されました。当時は学生の中にも同窓生がいて、多数の会員だったのですが今は教職員、役員のみとし、二十八年の会には青森県黒石市から伊藤弘君（明徳）が出席してくれた。このとき出席していた人見啓治君（中通）は半年後に病気で逝去された。

伊沢正義（五城目）　近江屋禄郎（中通）　刈田俊次郎（保戸野）　黒木俊貴（中通）　渋谷喜代二（船川）　白根礼吉（保戸野）　鈴木郁雄（中通）　鈴木弘（旭北）　関善光（花輪）　高橋哲次（日新）　藤原榮二（大曲）　松本善也（楢山）　山崎英郎（保戸野）　大隅繁吉（大曲）

料亭「江知勝」で年に一度

在京一九会、楽しく会合

秋田中学を昭和十九年に卒業した同期生の在京同期会が毎年開かれている。

この仲間は大正十五年と昭和二年生れが中心で、昭和をはじめから生きて平成に及んだ時代というこになる。若くて忙しかった頃は同期会どころではなかったが、年をとるにつれて人恋しさが増し、数年前から毎年会うようになった。会合は毎年十一月中旬の最初の土曜日、場所も湯島天神を本郷三丁目（少し寄った所にある料亭江知勝にきめている。湯島天神は上野駅に近い。ここならたまたま上京中で参加してくれた仲間が散会後上野発の夜行列車に飛び乗って帰秋出来るという訳である。

最近の出席者は秋田市からの参加者も含めて十五人弱というところ、秋田市からは同期会々長の辻兵吉君が極力都合をつけて出席してくれている。秋田の匂いをふんだんに含んだ氏独特の語り口で秋高の現状や仲間の動向など巾広く話をしてくれる。法事ぐらいでしか帰ることのなくなった在京会員にとって辻君の話はまことに楽しい。

会の終りには「天上遙かに」を合唱する。ふだん唱うことがない上に老化現象も加はって歌詞が覚束ない。「同窓会だより」に校歌同窓会応援歌の歌詞をいちど掲載してもらうと有難い。

ここ数年の出席者の顔ぶれは次のとおりである。昭和六十三年の会合は青森県黒石市から伊藤弘君（明徳）が出席してくれた。このとき出席していた人見啓治君（中通）は半年後に病気で逝去された。

伊沢正義（五城目）　近江屋禄郎（中通）　刈田俊次郎（保戸野）　黒木俊貴（中通）　渋谷喜代二（船川）　白根礼吉（保戸野）　鈴木郁雄（中通）　鈴木弘（旭北）　関善光（花輪）　高橋哲次（日新）　藤原榮二（大曲）　松本善也（楢山）　山崎英郎（保戸野）　大隅繁吉（大曲）

名の構成員です。新規採用者が少ないことから、メンバーはいつも同じですが、常に和気あいあいたる中で終始しています。応援歌、副歌、そして校歌等、高らかに歌って締めるのですが、学校名が出てくるところになると、「秋中」「秋南」「秋高」のドラ声が一際高くなり、自分たちの在学当時をアピールする面白い場面を繰り返しています。

今年は、二月一日、「おもたかや」で開催し、十七名の出席でしたが、我が大学附属高校の春の選抜野球出場が決まった夜でしたので更に活気ある会となりました。（利部記）

年次紹介

40年卒同期会

私達四〇年卒同期会（シマル会）は、昭和三十七年、現在の手形中台の校舎での入学第一期生であります。

永年の輝かしい伝統を誇る秋高への憧れが達成でき、新校舎となったことを契機に新たな伝統を創り上げていかなければならない秋高生としての胸の高まりが、今でも同期生の世話人会等で話題になっております。

二年生になっての新任式で鈴木健次郎校長先生が着任され、「汝なんのためにそこにありや。いつ、どこで、だれに、この問を言われても即ちに断言できる秋高生となってほしい。」とご挨拶されました。

真摯な態度で、語調は強くなかったが私達を震撼させる言葉でありました。同期生の一人は、「汝なんのためにそこにありや」の標柱を町内に建て、青少年の健全育成に努めております。三十九年卒から四十二年卒までの同窓生は、特にこの言葉が現在もバックボーンになっているのではないかと思います。

鈴木校長の言葉、いまも

鈴木健次郎校長先生のこうした生徒への姿勢が、学業、スポーツ両面に亘って輝かしい成績を残すことができたのではないかと思います。

児童、生徒の親として、この言葉の大切さを大事にしていかなければならないのではないかと常日頃考えております。

シマル会の発足は、赤沼新二君、高橋智徳君たちが中心となり、卒業十年後の昭和五十年に設立しました。

当初先輩からは、「さっぱりシマラナイではないか」と揶揄されましたが、依頼十五年間は決断力のある「シマル会」と自負しております。

三十名の世話人を中心にして、代表世話人、事務局長、会計と三役制を設けています。

会費は総会の際に三年分を納入する仕組みで、事業は名簿の刊行・四年間に及ぶ厄年払・忘年会、東京支部忘年会の出席などです。名簿の刊行にあたっては、父母名・実家の住所も掲載し連絡がとれやすいようにしております。近年のゴルフブームを反映して、四〇会ゴルフ同好会が発足し、会としてトロフィーを寄贈（二万八千五百円）し、年に四回程度開催しております。

創立記念事業において、野球部全国大会出場賛助寄付金においても日頃の団結力がよく表われているかと思います。

多情多感の時代を秋高生として過し、多くの学んだことを社会で実績できることになったことは大きな喜びであります。

母校の弛みない発展を常に祈念し、私達の活動が学校、同窓会運営の一助になれば幸いと思っております。

（佐々木雅樹記）

湊小児科医院
湊　貞造（S20⑤卒）
秋田市中通五丁目七―三四
電話（六六）三四五八

長谷山内科医院
医師　長谷山　博（S20⑤卒）
秋田市中通二丁目三―四三
電話 〇八六―三三―四八

株式会社継田電気商会
代表取締役　継田達蔵（S40卒）
秋田市土崎港中央五―三四
電話（六六）四五―五六八

三徳実業株式会社
代表取締役　畠山文夫（S40卒）
秋田市卸町五―十
電話（六六）三三―八四

清三屋施設工業株式会社
代表取締役　高橋正男（S40卒）
秋田市新屋大仲野五―十八
電話（六六）六四―九三三

小泉病院
院長　小泉亮道（S40卒）
秋田市中通四―一五
電話（六六）三三―六三七

スケートの若林選手
人見スポーツ賞受賞

二月に盛岡市で行われた国体スケート大会で、本校の若林育子選手が三千メートルで本県では初めて三位に入賞するという快挙を成しとげた。本県のスケート人口は、北国であるにもかかわらず、極めて少ないのが現状である。同時に厳しい練習環境などのハンデキャップを克服して、夏場にはローラースケートでのフォーム研究、走り込みなど、独特の方法で練習を行い、男子の湯田選手共々シーズンに入ってからの活躍は目をみはるものがあった。それらの努力と活躍に対して「その年度に最も県民に印象づけた個人に送られる」人見スポーツ賞の受賞は当然のことと思われる。若林さんは、「スポーツを通して、多くの事を経験し、学んできた。今回の入賞や受賞で、一つの目標に向かって挑戦することのすばらしさを体験できて幸せである。この貴重な体験をもとにこれからも勉強とスポーツに頑張りたい。」と語っている。今後の努力と飛躍を大いに期待したい。

インターハイへ部員一丸
剣道部

新チーム結成以来、全県新人大会（大館市）で宿敵秋田南を逆転で破り優勝。また一月十四日の第二回東北高校選抜優勝大会（山形県寒河江市）では強豪、福島、青森西、日大山形を破り第三位とまずまずのスタートを切ることができた。昨年度のインターハイ経験者が三人残るなど戦力的に見ても今年は大いに期待される。主将の淡路貴之、佐藤静憲、水品智、それに成長著しい二年の鎌田昌晃を加え、例年にない大型チームである。四月に行われた、魁星旗争奪剣道大会では、ブロックの決勝で関東の古豪、巣鴨高校に大将戦で破れはしたものの強豪を相手に秋高健児は大いに健闘。会場内外から秋高強しの評を得た。

全県総体では先輩が達成した五連覇をさらに伸し、是非とも宮城県石巻市のインターハイに出場し全国に秋高剣道部の名を轟かせたい。（渡辺明記）

卓球部
東北選抜大会で活躍

平成元年度の県高校新人卓球大会は、一月十日から十二日まで、県立体育館で行われ本校は、決勝で秋田商業と対戦、わずかに及ばず、二―三で惜敗した。県代表として出場した東北大会は二月二十日、二十一日一関市文化センター体育館で開かれた。だが、エース戸堀の活躍にもかかわらず、ブロック四位（二勝三敗）であった。

東北代表の座は逸したものの、今後の大会へ向けて収穫は大きいものがあった。（小林洋記）

常置委員会だより

「同窓だより三十一号」発行以後に開催された常置委員会は、次の通りである。

▽広報委員会　本年度初の同窓会だより第三十二号発行の編集会議は、四月十三日アキタパークホテルに於いて、小林担当副会長以下八名が出席して開催された。編集方針の基本は前年どおりとすることを申し合せするとともに、執筆分担や期日等の話し合いがされた。

なお、四月の異動により学校側委員の佐藤晋委員、出口金也委員が転出されましたので、後任として河先進（S三十一）委員と小林洋（S三十六）委員が補充されました。また、秋田魁新報社の田口清洋委員も大館市に転出されましたが、後任は後日補充することとした。

▽名簿委員会　本年度第一回名簿委員会は、五月十日千秋会館に於て小沢担当副会長以下十一名が出席して開催された。まず、学校側委員の小林洋委員が広報に移られた後任として、伊藤宏毅委員（S三十二）が充てられその紹介がされた。ついで事務局より「正誤訂正・異動表」の印刷・発送状況の報告があり、さらに、名簿会計の収支ならびに決算見込についての説明があって、全員これを了承した。

次に、今後の運営、特に「訂正・異動表」と今年三月卒業者のコンピューターへの入力をどのような方法で行うか。また、今後も継続して来る連絡・異動通知のはがきの入力をどう行うかなどが話し合われた。しかし、人、金、組織の問題点などがあって、今すぐ解決というわけにはいかないので、小委員会を設けて検討する必要もあるのではないかとの意見もでて、次回には各自のまとまった意見を出し合って、できるだけ早く結論を出すことを話し合った。

また、コンピューターの活用について話し合ったが、会員の要望にこたえるにはどの程度までのものが出せるのか。名簿委員会が会員にサービスできるものにはどんなものがあるのか。これも検討してみる必要があるとの意見がでた。

最後に、名簿は常に動いているものであり、絶対正確とか、完全だとは言えないが、会員から連絡のあったものは、すみやかに入力し、会員の要望にこたえる体制を整えたいものだとの意見があった。

広島委員長からは、そのためにも、また次期名簿の発行準備を考えると、委員会の充実が必要であり、名簿委員の追加、補充を皆さんと共に考えていきたいとの発言があった。

編集後記

○…花咲く春は人事の季節。当広報委員会にも大きく影響した。学校側委員の佐藤晋教諭が本荘高に出口金也委員が五城目高に転出。また若手の田口清洋委員も大館に転出した。せっかく馴れ親しんできただけにお別れは残念でならないが。これも世の流れでやむを得ないこと。改めてそれぞれの立場でのご健闘を祈りたい。

○…学校側委員に新しく河先進氏（S三十一年卒）、小林洋氏（S三十六年卒）が加わった。これまで同様よろしく。

（信太記）

平成2年度の大学入試
合格率、大幅アップ
国公立、私大ともに健闘

合格率は歴代で二位に

平成二年度入試の動向はあらゆる面で注目されたものとなった。特に①私大のセンター試験参加②分離分割制の拡大③受験科目の選択の多様化等によって、もはや従来の感覚での志願校選択は無意味なものに変りつつある。

本校生徒も志願校の選択には例年以上に苦心した跡がみられる。前期の不合格者の場合、後期に同一校かB日程の学校を選ぶわけであるが、これがいずれも思わしくない結果が予想された。つまり後期は難化し、B日程は合格しても進学したくないという事実上の一校受験となるなど事態は深刻化していった。

それにもかかわらず、本校生は善戦した。東北大二十三（昨年十二）を筆頭に北大七（五）千葉五（一）東大五（四）東工大一（〇）お茶の水大四（〇）一橋大二（二）横浜国立大七（二）東京都立大三（〇）秋田大八十六（七十九）など苦しみながら、昨年を上回る好成績を残した。しかし弘前大八（十四）東京外語大三（五）東京学芸大九（十四）信州大一（七）金沢大〇（十五）京大三（七）など受験者の力不足も重なって大きく後退したのである。国公立大の合格者総数は二百二十一名で昨年を四名下回る結果となった。

ただこの数値は前期合格手続者四十八名の出た本校としては気にならないところである。むしろ国公立大の実合格者数が前年度よりも十一名も増え、全体の合格率が六三・一％に達し、共通一次試験が始まった昭和五十四年以来第二位の好記録となった点を特筆すべきであろう。

東高西低の私立大学合格

さて、私立大学の情況に移ろう。早稲田大九（昨年九）慶応大六（五）青山学院大十（四）中央大九（六）日本大九（三）日本女子大七（二）明治学院大十一（三）立教大七（三）など東京地区では順調な伸びを示したが、中部地方以西の大学では受験者が大幅に減ったことも影響し、立命館大、同志社大、京都外語大でそれぞれ各一名（昨年三校で七名）と淋しい結果となった。

ただし、私立大全体の合格者数をみると百四十九名（前年百七名）進学者数でも八十九名（五十九名）ときわめて高い数値を示している。本校生も中堅以上の難関校に合格すれば、そのまま進学することが次第に定着しつつある。

ちなみに前記東京八校の合格者六十四名中三十九名が進学しており、決定率は実に六十％に達するなど従来考えられない傾向が認められる。また国公立・私立のダブル合格のは場合も、個人的な好みも作用して私大をとる（例えば都立大法→中央大法。秋田大鉱山→工学院大工など）ケースが増えてきている。もはや、本校生の大学選択の基準がすべて国公立大優先といった過去の理念を完全に払拭しつつあることが明らかとなろう。

厳しさ加わる三年度入試

最後に平成三年度入試について展望を試みたい。その特徴はおよそ①分離分割制の拡大（二十七学部増加）②受験科目選択多用化に伴う受験校選択の複雑化が一層進行する。③二次試験（論文・実技・面接の比重がさらに大きくなる。

これらの条件を踏まえ本校生の前途を考える時、道は極めて険しいとみなければならないし改善すべき点も多いと思われる。生徒一人ひとりが適性に応じ大学・学科を選択し、来春めでたく現役合格を果すためにも、皆さんの側面からの温かいご支援を心からお願い申しあげます。

（進路指導部主任　加藤　民夫）

柔道留学記
けじめ尊敬に値

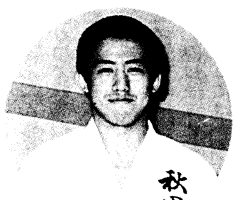
小松紀幸（三年）

今回の交換留学は、僕にとって初めての"海外"であり、まして派遣先が、いわばあこがれのアメリカということで、出発前から大いに期待していました。

派遣地のワシントン州スポケンという都市は、なかなかの近代都市といった感じがありました。ホームステイ先は、そこから車で二十分程の通りに面したごく普通の家庭でした。"Hello. Nice to meet you."と四人家族総出の出迎えで、僕も"Nice to meet you."と元気に答え、握手を交わし、いよいよ始まるんだという思いがこみあげてきたのを覚えています。

最初に柔道について話すと、学校に柔道部はなく、練習は町道場で週三回行いました。むろん畳はなく、つるつるのレスリングマットを使っていました。そこでアメリカ人の柔道に対する考え方ですが、年齢は全く気にせず、とにかく段位によって上下関係が決ってゆくのです。僕も名前の次に"You what dan?"と尋ねられました。そういう考え方が影響してか、段位の下の者に投げられると、歯をむき出して怒ってかかってきます。これがアメリカ人の開拓魂かなどと思い、負けず嫌いな所を日本人はもっと見習うべきだと感じました。技術的にはこれといったものがなかったのですが、ちょっとでもすきを見せると、すぐ関節技にくるのには驚きました。

普段の外見からとても高校生とは思われないのがかれらです。しかし同じ校舎で学んでみて、気付いたとこは、一人一人が皆勉強するために学校に来ているという意識が相当強いものがありました。勉強以外の生活は比較的自由で、かれらの生活のけじめのつけ方は尊敬もし、かつ見習わなければならないと思いました。



終わりにホームステイの実生活ですが、最もなじめなかったのは、食事です。朝昼ともトーストやピザに、ミルクが付く程度で、本当に簡素なものです。しかしその分、夕食の多いこと多いこと、あきれるくらい出され、しかも毎晩肉料理ですから閉口させられました。アメリカ人の体型について妙なところで考えたりしたものです。何といっても、苦労は言語です。聞くのはともかく、話すとなると、とたんに駄目になり、単語が思い出せず、一日に何度も辞書を引くことになります。

三週間のアメリカ生活は苦労もありましたが、今となっては非常に得がたい経験でした。大国アメリカの言語・思想・生活習慣に触れ、共に暮らしたことは、僕にとって、自信となり、誇りでもあり、なおかつ素晴らしい思い出として、残りの高校生活に大きな影響を与えると思っています。

僕はおそらくかれらのあの活き活きとした瞳だけは生涯忘れないと思います。そしていつか僕も、何か目標に向かって、あのような輝く瞳をもつことができることを確信し、かれらに負けない充実した人生を送りたいと心の体験から改めて誓いました。